幼児の教育　第98巻　第1号　平成11年1月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289−0836

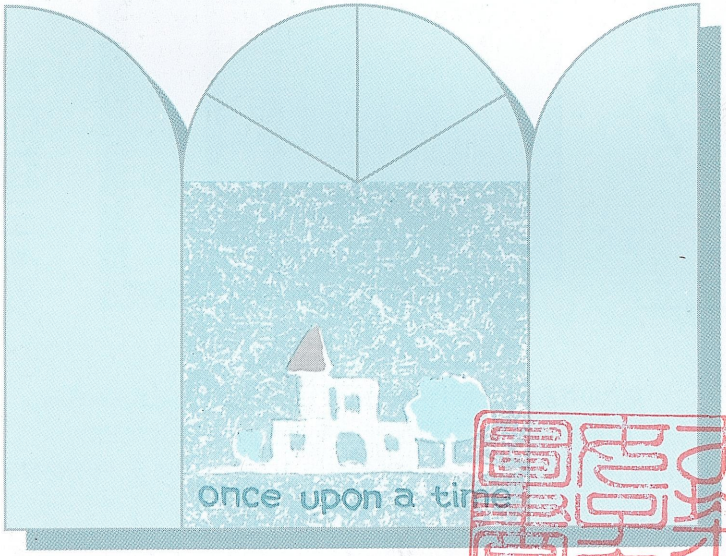
N24
1
98[1]

家庭—保育所—幼稚園

幼児の教育

11. 1. 21

'99 1



附属図書館

第98巻 第1号 日本幼稚園協会

倉橋惣三の「保育者論」

発売中

好評既刊本！

倉橋惣三・著

倉橋惣三が折にふれ書きとめた
「幼児の教育者」「保母諸君と語る」「教師論」からなる保育者論。
倉橋は保育者に何を望み、どんなことを期待していたのか。
これから保育者を目指す人、今の保育に行きづまっている人、明日の保育を
よりよいものにしたいと考えている
幼児教育関係者におすすめしたい必読の一冊です。

B６変型判　200頁　定価：本体1,300円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第98巻　第１号

幼児の教育

目次

——第九十八巻　第一号——

ある日……（4）

巻頭言　今、保育で必要なことは何か
—園内研修で語り合うことから—……高杉　自子…（6）

震災後の子どもたち(21)　おとなと出会うということ……森末　哲朗…（9）

「児童の世紀」を振り返る—その十一—……本田　和子…（18）

幼児期—排泄とアイデンティティを考える—……津守　真…（28）

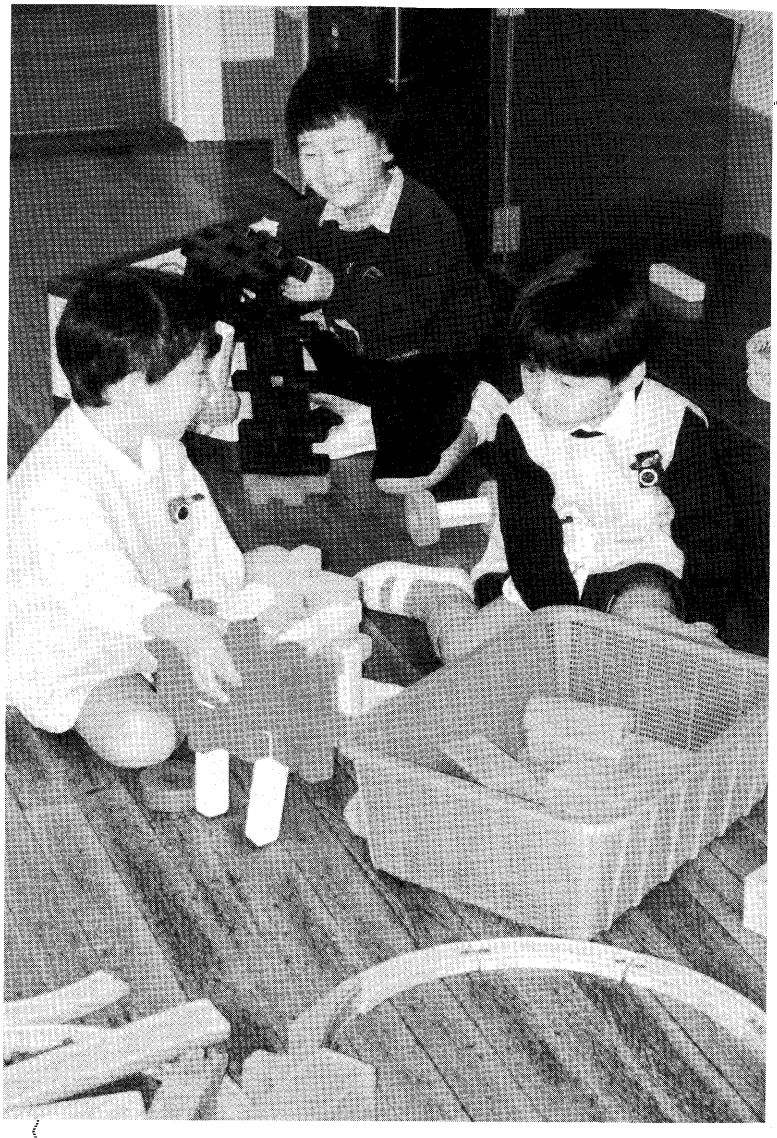
© 1999
日本幼稚園協会

子ども時代と私(14)　いのち恵まれて……上坂元一人…（36）
続・『ポケットモンスター』考……山本　政人…（43）
ユーゴスラビアを訪ねて……入江　礼子…（50）
ある日の育児日記から(97)……佐藤　和代…（57）
自分を確かめる……田中三保子…（58）

表紙絵／北村　俊道
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「ひんやりとした手」
編集委員／田代　和美・上坂元絵里・吉岡　晶子
編集部／仲　明子

ある日

撮影・平野　清

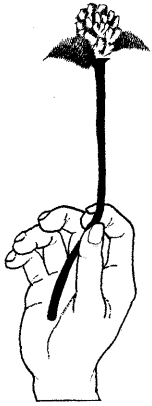


巻頭言

今、保育で必要なことは何か

―園内研修で語り合うことから―

高杉　自子（より）



ここ一～二年は少年たちの思いがけない犯罪に大人、社会は振り舞わされ戸惑った。反面幼児教育・教育への関心は深まった。これはよかったかもしれないと思ったが、自己チュー児新聞記事や学校崩壊などがテレビで放映されると、幼稚園教育要領が自由とか主体性を主張してから子どもが変わったと言われた。しかし子どもは大人の模倣だ。社会の腐敗は進んでいると思う。食物への毒物の混入事件、贈収賄、高官の背任行為、自分の思

いが通じないと愛人まで殺すような命の尊重を無視した事件などとめどもない暗いニュースには憂うつになる。

社会や教育のせいにして片付け結局は自分を育てることを知らず、思慮の乏しいモラルの育たない日本の土壌につきあたる。問題は自分の足もとにある。生きることの重み、生命の尊さ、多くの恵みをもらって生かされている自分に気づかず、周りを気にし欲望を満たし安易さや安楽の中にどっぷりとつかり、目に見える価値を追うあまり、人間として生きる自分が見えなくなってしまった気がする。

幼児教育は量的に普及した。しかし、最も理解されていないのが幼児教育ではないか。いや、「乳幼児期の子育てが重要なのだ」と言うことが大事だと錯覚してしまったのだろうか。

しかしなぜ大事なのか、どうすればよいのかが何も伝わっていない。各家庭教育で受けもってきた子育ての伝承は、社会に移って切れてしまったのかもしれない。大人にとって乳幼児期は過去であり、記憶にない。社会が受けもってくれ、子育てから解放されたことだけが有難く、「おまかせする」に自己満足した。特に戦後の幼稚園が凄(すさ)まじく普及した時、「誰もがやれる教育」という最も安易な受けとめで、形だけが先行したのではないか。

「幼児だから」小学校を薄めればよい。施設さえできればよい。先生は「歌って踊ってチィパッパ」のイメージであり、テレビのおねえさんというような形が先行し保育者の本質は問われない。私の経験でも学校の都合で小学校から配置転換された時の自分の認識は

甘かった。しかし足を踏み入れたとたん、その難しさをつきつけられた。未知の世界はすばらしかった。

一旦は逃避したもののひきつけられた。

特に倉橋惣三の著書にふれて目を開かされたが、精神が伝わっていない現場にも驚いた。なぜ伝わらないのだろう。たしかにその実践は難しい。それに難しいことを拒否する体質がはびこっていく。困難に立ち向かう意欲や、未知なるものへの好奇心、チャレンジよりも過去の経験に安住してしまう。私もつい、溢れる足許の疑問の対応に追われる毎日を反省した。

もっと、幼児教育、子育ての重要さと価値、理由と在り方を親や社会へ伝えなければ……。

まず、保育者一人一人が、自分の保育、保育観を自分の言葉で語ることが大切ではないか。具体的な子どもの姿と、その読みとりや対応、そして自分の気持ちと「なぜ」という「問い」を、他者、特に親に投げかけることも必要なのではないか。事実からの問いと共に考え合うことこそ大切なのだ。担任まかせでなく園長も共に――。

そこで、今こそ必要なのは園内研修である。日日の保育を語り合い、自分を振り返り、保育を省察し、互いに自己を高め合うカンファレンスのすすめである。

「子どもは何を求めているか？　そのために答え得る教育とは？　今、何を必要とされ、何を為すべきか？」を根本のテーマとし、心を開き話し合う機会を作ることが必要ではないか。ぜひ足もとから着実な歩みを続けよう。

（子どもと保育総合研究所）

震災後の子どもたち(21)

おとなと出会うということ

森末　哲朗

最近、尼崎に住む古くからの友人に会った。

彼女は障害者のセンターで働いていて、仕事柄ボランティアの若い学生たちとの接触も多いようだ。

その学生たちの中に、ひとつ気になる傾向があると彼女は言う。

「どんなことなん？」

「……ひとことで言ったら、あんまり、おとなと出会ってへん、いうことかな」

「もまれてない、いう意味やろか？」

「まあ、そんな感じかな」

そういえば、近頃の子どもたちにとって、おとなといえば親と教師しか知らないという指摘を、何かの本で読んだことがある。

そのことがどんな意味を持つのか、あまり深くは

考えずにきたのだが、彼女が指摘したことと重なる話を聞いたことを想い出した。

阪急六甲の南側に、開店して三十年あまりになる喫茶店がある。そこのママさんが、こんなことをため息まじりに語っていたことがある。

「少し前のことですけどね、K大学の学生さんが来てたんですよ。『おばさん、おばさん、水がこぼれたよ』と言うんです。テーブルのところに行ってみたら、グラスが床に落ちてるんですよ。『これ、あんたがこぼしたんとちがうの？』と訊いたら、『はい』と涼しい顔なんですよ。自分でこぼしといて、その言い方はないでしょう。つい、説教してしまいました」。

こんな内容の話だった。その学生にとって、全くの他人であるママさんと、自分の家にいる母親との区別がよくついてないのではなかろうか、そう思えた。それにしても、たとえ自分の家でグラスを落としたとしても、「お母さん、水がこぼれたよ」みたいな言い方はないだろう。

ママさんとそんな話をしていたら、

「私もながいあいだ、K大学の学生さんを見てきましたけど、変わりましたね」と言う。

客としてやってくる学生たちを見つめ続けてきた眼には、その変化がよく分かるのだろう。ひと言で言えば「世間知らず」が多くなったということだろうか。

K大学といえば、このあたりでは名の通った国立大学である。そこに合格するまでの十八年間、いや、浪人生活もあるとして二十年ほどの時間を、「おばさん、水がこぼれた」と呼んだ学生は、どんな風に過ごしてきたのだろうか。親と教師以外のお

となと、しっかり出会ったことがあるのだろうか。家と学校と塾とコンビニくらいが彼の世界のほとんどだったのだろうか。もしそうだとしたら、他者として「世間」を教えてくれるおとなと出会う可能性はとても低いものだろう。

こんなことを思っているぼくも、いざ二十歳の頃を振り返ってみると、穴があったら入りたいような恥ずかしい経験をいくつもいくつも重ねていた世間知らずだったから、あまり大きなことは言えない。そして現在もまだ「それで、五十歳？」と言われても何の不思議もない、頼りない中年ではある。

しかし、そんなぼくでも、やはりこれは気になるという体験を、この夏淡路島でしてしまったのである。

ボンボンベッド

夏休みも終わりに近づいた土曜日、淡路島へ泊まりがけで魚釣りに出かけることになった。参加者はどんぐりクラブの保護者数人と子ども十人ほどだった。

その中に、一郎（仮名）がいた。彼は四年生。神戸市北区に住んでいて、灘区にあるどんぐりクラブには普段の放課後は通えないのだが、夏休みの間だけ母親が車で送り迎えをすることで、毎日通ってきている子だった。

明石大橋を車で渡り、淡路島で農業をしているさとし（六年生）のおじいちゃんの家に全員が泊めてもらうことになった。実直で勤勉なおじいちゃんは、皆んなを快く迎えてくれた。

土曜日は思いきり早寝をして、翌日曜日の朝は四時に起きて、暗いうちに磯に向かった。

久しぶりの潮の香は気持ちが良かった。釣果はあまりはかばかしくはなかったが、海と太陽にはさまれて、ビールを飲みながら竿を垂れる時間は格別のものがあった。

昼をまわって、少し疲れて、さとしのおじいちゃ

んの家へ引き揚げた。庭には縁台と、折りたたみ式のボンボンベッドがあった。

滅多にすることのない早起きのため、身体を伸ばしたくなったぼくは、そのベッドで大の字になっていた。

そこへやってきたのが一郎だった。

「おっちゃん、そこ、のいて。ぼくが、すわる」。

いきなりこう切りだされて、ぼくはむっとなってしまった。一つしかないものをぼくが独り占めしているのだから、こっちもほめられたものではないのだが、「のけろ」はないだろうと思えた。まして、一郎のものでもないのに。

「そんな言い方で、のける思とんのか！」

咄嗟にこんな言葉が口をついてでてしまった。一郎はとみれば、ポカンとした顔でこっちを見ている。あーあ、柄の悪さがでてしもた、と吐いた言葉への後悔はしたものの、このベッドは断じて譲らんぞと決意に近い感情に支配されている。改めて一郎の顔を見ると、「このおっちゃん、なんでこんなに怒ってるんやろ」と、不思議そうな表情をしている。そうか、さっきの一郎の言いまわしの「おっちゃん」のところを「お母さん」に言いかえれば、容易に理解ができる。

「お母さん、そこのいて。ぼくが、すわる」。

一郎が母親をつかまえて、こんな物言いをしている場面には、何度かでくわしたことがある。しかし俺はお母さんではないぞ。お父さんでもないぞ。西区にいる一郎のおじいちゃんでもないぞ。三つや四つの歳の子が言うようなことを、十歳にもなって言っていることを黙って認めるわけにはいかない。

一郎はすごすごとその場を去った。

ぼくには、「おばさん、水がこぼれたよ」の学生と一郎とが重なって見える。一郎は十歳。学生は二十歳。あと十年のうちに、一郎が多くのおとなと出会い、少しは「世間」を知り、二十歳になった頃にはこの日のことは「ガキの頃の想い出」で済むのか

もしれない。でも、そうなる確証があるわけでもない。

地震とチャパツの少年

十歳から二十歳と書いたが、この年頃というのは、少年期から青春期を駆け抜ける時期でもある。多くのおとなの人生に触れたり、いい出会いを持ったりすると、それが一生のものにさえなったりする時期でもある。

ところが、当の少年たちにとっては、自分もそうだったが、あまりおとなのそばには寄って行きたくないという感情を持つ時期でもある。おおかたのおとなは「歳いくつ?」「何年生?」「ああそう、じゃあ受験やね」「どこ受けるの?」、ステレオタイプの質問に会い、いちいち応えるのがうっとおしい。久しぶりに顔見知りのおとなに出会ったら「大きくなったね」とくる。当り前だろうと言い返すとカドがたつから、あいまいに笑ってその場をやり過ごす他はない。

チャパツにでもしていると、こんどは寄ってくるおとながまずいない。たまに寄ってきた時にはロクなことがない。自分はあずかり知らぬことを、「お前がやったんやろ」と責めたてたりする。

そんなわけで、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なその時期に、少年はそのことを避けたいと思い、おとなは、かする程度の出会いしか持てないでいることがままあるようなのだ。

「近頃の若いもんは」とおとなはぼやき、少年たちは「けっ!」と舌を出す。

ところが、あの大地震の混乱の中で、おとなと少年たちとのこうした膠着状態が一挙に突破されたという稀有な体験を、多くの神戸市民は持っている。

日常の中ではかけらほどの接点さえもてないでいる少年（または青年）と老人。それが救援活動の中で出会い、あるチャパツの少年は自分の手を握りしめて「ありがとう、ありがとう」と頭を下げる老人

を見て「オレ、あんな風に言われたん、生まれて初めてや」と思う。老人にしても、普段は「ややこしそうな子」と、チャパツの少年たちを眺めていたかもしれない。だがいざとなったら、頭が赤いか黄色いか、そんなことはどうでもいいことだ。そのことに気がつく。

日常を細かく区分けしている垣根が取り払われて、人間と人間との裸の対峙が生まれる。

おとなと出会うとは、そういうことだろうと思う。地震に見舞われて良かったことなど何一つないのだが、敢えて「良かったこと」を挙げれば、普段は見向きもされないチャパツの少年たちが、テント村のおっちゃんやおばちゃん、仮設（住宅）のおじいちゃんやおばあちゃんたちから大いに見直されたことだろう。そのことは少年たちにとっても、自分の生き方を考え直す契機にさえなったわけで、もしあの大地震がなかったらこういう出会いは生まれなかったかもしれない。

話を一郎に戻そう。五〇〇年に一度と言われる程の大地震が、そんなにしょっちゅうやってくる筈もないわけで、そんなものに妙な「期待」をかけるのはほとんど意味がない。

もっと日常の中でこれからの十年を考えていくべきだろう。ではどうすればよいのか？

仕事柄なのか、元々のクセなのか、高みに立って「考察」するだけでは気が済まない。かといって、良い知恵も浮かばない。

ただ、もしかするとそのヒントにはなるかなと思えることが、意外にとても身近な自分の足元にあったのだ。

キャンプでいちばんおもしろいこと

この夏、兵庫県養父郡大屋町にある「おおやスキー場」へキャンプに出かけた。今年で十一回目。毎年、七泊八日の日程で行っているが、衣・食・住の基本的な部分は子どもたち自身が担うことになっている。お釜で三度の飯を炊き、洗濯機で服を洗い、干したりたたんだり、部屋の掃除をしたりと、子どもたちはそれなりに忙しい。

仕事はおとな、子どもは遊び、という親子キャンプなどにありがちなやり方をやめて、「子どもも生活者のひとり」という考え方でいわば「合宿生活」を行うのだ。

小学一年生から六年生までのタテ長の集団だから、仕事についてはかなりの能力差があるのだが、そこはあっさりと認めて、やれる者がやれることをするという動き方をしている。

難しいのは、子どもは子どもなりに人間関係を持っていて、そこがうまくいっている年とそうでない年とでは、同じキャンプでも随分と味わいが違ってくる。いさかいが絶えない年もあれば、比較的穏やかな年もある。

しかし、いずれにせよ、子どもは大いに自己主張をし、いさかいを起こし、自分とは異った「他者」を発見して成長して欲しいことには変わりがない。そのためには、子どもたちが自分を磨くための「群れ」の存在がとても大きな意味をもっている。どんぐりには、二十四人の群れがあるのだ。

神戸市長田区で、震災以降の街づくりを通した人間模様を、いまもなお撮り続けている映画監督がいる。青池憲司さんだ。彼とおつき合いをさせてもらうようになって、かれこれ十年近くになる。その彼を中心とした「青池組」の撮影隊が、「群れの中で子どもは育つ」ということをテーマに、このキャンプに同行していた。NHK教育テレビで、どんぐりの日常や畑の活動やこのキャンプでの様子が九月十

九日にオン・エアされた。

キャンプ中のある日、編集の村木勝さんは幾人かの子どもたちにインタヴューを試みていた。ひと通りのインタヴューが終わったあと、村木さんはぼくの方にやって来てこう言った。

「森末さん、このキャンプの中で一番おもしろいことはなに？　という質問をしたら、まさひろ（六年生）はどう答えたと思います？」。

さてさて、お釜を使って皆んなのために飯たきをすることだろうか？　キャンプファイアーだろうか？　魚のつかみどりだろうか？　それとも学校的なこと一切から開放されて仲間と過ごすことの総てだろうか？　よく分からない。

「なんやろ？」

「それがね、いろんなおとなと会えること、と彼は言ったんです」

あっ、とぼくは絶句してしまった。そして、なるほど、と首肯いた。

◀少しこわいけど頼りになる横山のおっちゃんと、キャンプの後半でちょっとさみしくなった三年生のはると、おっちょこちょいの犬トラ

七泊八日のキャンプ全体が、一人一人の子どもを生活者として磨くための「教育装置」だということの理解は持っていた。ところが、そのキャンプを支えるために参加するおとなの位置、おとなと子どもの関係については、こういうことだと明言できる程の理解は持っていなかった。子どもを中心にして、全日程を支えるためのサポーターという把え方をぼくはしていたようだ。

まさひろの答えを聞いて、「そうだ、子どもたちにとっては、個性豊かなおとなたちとの出会いの場でもあるのだ」ということを、改めて肝に銘じた。

七泊八日の間に子どもたちが出会うおとなの数は、地元のスキー場の皆さんも含めると軽く五十人は越える。子どもに厳しい人もいれば、甘い人もいる。こわいけれど頼りになる人もいる。よく声をかけてくれる人もいれば、無口な人もいる。そうしたおとなたちの間をかいくぐりながら、「あのおっちゃんはここまでなら許してくれる。あのおばちゃんは、そうはいかん」と、子どもたちは自分とおとなの間にある距離を本能的な物指しで計測する。叱られたり誉められたりの経験を繰り返し繰り返し積み重ねることで、子どもたちの思考に「練り」が入る。「世間」に明るくなる。

おとなといえば親と教師くらいしか知らない子どもが増えている時代の中で、厚みのある出会いを楽しみつつ育つ子どもがいるのだ。

そういう場として意識して創った覚えはなかったのだが、一緒に働き、一緒に遊ぶ生活の中でのおとなとの出会いは、とても大切なことを学ぶことのできる場でもあったのだ。

「おばさん、水がこぼれたよ」と言った二十歳は、まさひろとは決して重なりはしない。

（六甲学童保育所どんぐりクラブ）

「児童の世紀」を振り返る

――その十一――

本田　和子

キーワードとしての「人口動態」

今世紀は、子ども人口の動態が、為政者の関心事となり、さらには、広く人々を脅かしたりもした時代であった。したがって、人口動態をキーワードとして、今世紀を浮かび上がらせる事が可能だろう。

特殊出生率などいう用語が、凶々しく私どもの耳目を脅かすようになったのは、一九九三、四年ころからだろうか。たとえば、一九九三年の特殊出生率は一・五を切り、一・四六とその激減が憂えられたのだった。一人の女性が、一五歳～四九歳の間に子どもを産んだと仮定した場合の平均出生児が一・四六、ということ

は、一対の男女が一・四六人の子どもしか産出しないことであり、次の時代に向けて、二人がかりで一人と半分の子孫も送り出せない。こんな状態では、加速化する高齢化社会を支えることなど到底出来はしない、とばかりに、俄に社会的危機感が増幅されたのである。

しかし、出生率の減少が焦点化されるのは、強ち今日に限られるような珍しいことではない。遡れば、前世紀の後半、つまり、わが国江戸時代の後期にも、農村人口の急減を憂えた為政者たちは、さまざまな対案を提示している。たとえば、それまでは等閑視されていたかに見える「間引き」に対して、にわかに禁止令が出されたり、あるいは、出産を奨励して育児給付米が政策化されるなど、出生率を高めるための対策が、あの手この手と講じられているのである。

二〇世紀に限って見るなら、優生学を背景としてスタートした子ども観の上で、先ず、「子ども」は、多産多死の状態から救出されるべきものとされ、少産少死の方向が努力目標とされた。産児制限運動が活発化したのは、このことの証しである。女たちに向けて、「少なく生み、健やかに育て、よい教育を施す」ことが、知性ある母親の義務として推奨されたのである。

しかし、一九二〇年代には、急激な人口減が不安材料とされ始め、人口論議が盛んとなった。一九二七年には出生人口四万三千六百六十八人の減少が記録され、その原因が産児制限と経済的不況とされている。時を前後して、社会事業調査会が妊産婦保護や乳幼児の保護のための実施事項を答申し、次いで「児童保護事業体系」を立案して同会の決議事項としている。季節保育所の設置数が増え、母子ホームが設立されるのもこの時期であった。

母子の福祉に向けて、にわかに積極姿勢を示し始めた為政者の動向を、どのように把握しどのように位置付けるかに関しては、さまざまな解釈が成立してい

る。たとえば、人口と国力を結び付ける人口観の進行、さらには、来る第二次世界大戦に向けての布石などと見ることは容易であろうし、あるいは、「産児制限」という形で女性たちが自身の身体をコントロールすることを危惧し、風俗紊乱などの名で弾圧を企てた家父長主義の反映と見ることも可能かも知れない。いずれにせよ、このまま放置してはおけないとばかり、妊娠・出産などいう個々の家庭や個人の問題のなかに、権力が並ならぬ関心を示し、積極的に介入してきたことは確かと言えよう。一九三〇年に、警視庁は、東京内での「産児制限・妊娠調節」に対して禁止措置を講じたりしている。

一九三八年、内務省から厚生省が分離・独立したが、一九四一年の官制改正により、社会局で扱われていた乳幼児保護に関する諸事項が人口局の管轄内に移行されている。公の介入により、以前にまさる保護育成の営みが実現化し始めたのは確かである。しかし、それらが、人口局の管轄下で施行されたとなれば、権力の意図するところが透けて見えてこよう。はからずも長期戦に突入し戦力補強が要求され始めたこの時代に、子ども人口の動態は、国運を左右するものとして為政者たちの関心事となったのである。一九四二年、「欲しがりません、勝つまでは」という標語が流行して禁欲が美徳とされた同時期に、一方では「うめよふやせよ」運動が展開され、妊娠・出産など生殖に関する営みからは、禁欲主義の追放が奨励されているのも、それを証しする好適例と言えそうである。

ところで、世界を分割した大戦がわが国側の敗戦裏に終結し、戦時体制のすべてが否定されてその価値を失墜させると、生殖の営みも、それらの外圧から解かれ、新しく個人に属する問題として積極的に展開され

始める。一九四七年以降、よくも悪くもわが国を活性化した出生率の急増、いわゆるベビーブームは、こうした動きの見える形の現れであった。

そして、ブームがピークに達した一九四九年には、年間出生数が約二七〇万人となり、史上最高が記録されることになる。それに対して、同年には人口問題審議会が産児制限に関する指導機関の必要性を答申し、さらに優生保護法が改正されて「経済的理由による妊娠中絶」が認められているが、これらの動きからは、出生率の減少、あるいは急増に対して、関係者たちが過敏に反応する様子が透けて見えてこよう。したがって、子ども人口の変動と、それに注がれるまなざしの変遷は、今世紀を解明する一つの徴と見てよいのではないだろうか。

出生率の急増と急減

先に触れたように、特殊出生率の激減は、いま、私どもの周囲に、将来に対する深刻な不安を巻き起こしている。確かに、一国の人口動態から見て、先に上げた数値の変動、すなわち、一九五〇年に三・六五であった特殊出生率が、四〇年後には一・五を下回り、なおかつ止まることを知らずに低下し続けているという状態は、為政者のみならず、人々を動揺させるに十分と言い得る。もし、現状を維持しようと考えるなら、男女二人の人間の後継者は少なくとも二人は必要であろうに、何しろ、一対の男女が生涯にわたって、一人と半分以下の子どもしか産出しないと言うのだから。

一九五〇年、つまり第一次ベビーブームの翌年、団塊の世代と呼ばれた人たちが誕生し、成長への歩みを開始したその年の「大人対子ども」の人口比率を見ると、義務教育年齢の子どもの数といわゆる労働可能世代との数は、二千九百四十二万八千対四千九百六十五万八千となり、五九パーセントの高比率で子ども人口

がその盛況を誇っている。それに比して、一九九三年になると、その比率が二四パーセントと低下する。ということは、出生数の絶対的減少とともに高齢化の進行速度が早いため、国民全体の人口数のなかで子どもの占める比率が、急カーブを描いて減少し続けていることが歴然なのである。

このためもあって、出生率の現状が話題とされるとき、とかく、それは、将来の労働人口の減少、すなわち、納税力の減退＝高齢社会維持能力の弱体化として問題視されることになる。要するに、子どもが減り続けては、いま大人である人たちの将来、すなわち、老後の生活が心配であるという、大人側の身勝手な不安材料として話題とされるのである。何しろ、戦後のベビーブームで大量に生まれてしまった人たちの老後を、半分しか生まれていない人たちの世代が支えることになるのだから……。

しかし、子どもに関する人口動態グラフの語るもの、とりわけ、その極端な増減は、単に、大人世代の老後に問題を生み出しているだけではない。子どもたち自身にとっても、それは、避け難く厄介な問題を発生させていて、彼らと、彼らとのかかわりの深い大人たちを困惑させているのではないか。何しろ、ベビーブームの名の下、膨脹の極みに達した子ども集団がざわざわと通り過ぎたその直後に、急激に規模の小さくなった子ども集団が粛々と通って行こうとしているのだから……。しかも、大騒ぎする子どもらの群れに代わって、過剰なまでに彼らを取り巻き始めた情報のネットに囲まれながら……。

この急変が、子どもと大人の関係の間に、多少ならぬ更改を強いるものであることは言うまでもない。今世紀は、子ども人口の増減に振り回された時代だった

のである。しかし、私どもは、かつて経験したことのないこの事態を、十分に認識することも出来ず、したがって十分な対処も出来ずにいる。徒にうろたえ混乱し、すべてが後手後手に回って後追いに終始しているのが実情ではないか。そこで、特に今世紀後半の問題として、このあたりのいきさつを整理しておくこととしよう。

子どもパワーとパンクする義務教育

一九五〇年生まれの赤ん坊たちが、義務教育世代となる一九六〇年には、小学校児童数が千二百五十九万人を越えた。それに対して、教師の数は三十六万人、管理職等の特別職を除くと、クラス担当の一般教師は約三十万人程度であろう。それに対して、文部当局が学級編制に関する定数を検討し、八年後に遅ればせながらと打ち出したのが、五〇人学級という基準であった。

しかし、戦後の校舎・教室の不足では五〇人学級すら難しく、ありったけの教室に子どもをギュウギュウ詰めに詰め込んだクラスや、午前・午後の二部制なども実施されて、とにかく、小学校教育は児童数の膨脹に対処し切れないまま、パンク寸前の業務を続けていたと言われる。一九五七年、文部省は、全国小学校の三四・二パーセント、そして中学校の三三パーセントが、「すし詰め学級」であると発表している。

学校教育は、一九四五年の敗戦を契機として、慌ただしく、しかも、他律的に大幅な転換を余儀なくされていた。戦災孤児や浮浪児が街を徘徊し、多くの子どもたちが毎日の食事にもこと欠く日々を送っている一九四六年に、アメリカ教育使節団が来日し、その勧告によって「男女共学制」が実現を見る。「男女七歳にして席を同じうせず」という、伝統的性別観の問い直される余裕もなく、アッとも言う間もない急変であった。それまで、別々の中学校・女学校で学んでいた男

女生徒が、ある日、突然、校庭に対面式に整列させられ、校長の号令一下、「よろしくお願いしまーす」と挨拶を交わし合って、男女校の合併が決行された、などというエピソードも残されている。ＧＨＱの指令により、従来の学校制度を改めて、小学校六年間、中学校三年間を義務制としたのが一九四七年である。いわゆる六・三制のスタートである。そして、同年、文部省は、教育基本法と学校教育法を公布し、戦後民主主義の徹底に向けて、新教育指針に基づく教育の早急な実現をモットーに掲げた。

この教育改革の性急性に関しては、既にさまざまな検証がなされて問い直しが行われ、時には制度改革の必要性が叫ばれたりもしている。しかし、それら制度面の変革にもまして、敗戦を契機として、皇国史観に基づく軍国教育から、急転直下、自由・平等をモットーとする平和で民主的な教育への切り替えを余儀なくされた現場教師たちの困惑こそが教育現場の問題であったろう。生徒たちを前にして、果たしてどのような態度をとり、どのように彼らを指導すればよいのだろうか。子どもたちが、指示に反した行動を取るときは、どのようにそれを是正し、また、彼らの言い分は、どこまで聞いてやればよいのだろう。そんな日常的な細々としたことがらが、日々、教師たちを悩ませ、子どもらに対する教師としての自信を喪失させていったと言われる。

こうした混迷のなかの教育改革の傍らで、子どもたちの体位の低下は著しく、一九四六年の文部省統計は、一九三七年との対比において、都市児童の体位の低下を指摘し、特に六年女児の場合、体重で平均二・二キログラム、身長で平均四・四センチメートルの減少が報告されていた。一九四七年には、欠食児童の激

増が、一九四八年には、複数の産院で収容された乳幼児の栄養失調による大量死亡という事件が、ニュース欄を賑わせている。また、青少年のヒロポン禍、少年非行が問題視され、さらに、児童福祉法違反の人身売買や児童労働、あるいは母子心中など、暗い話題に事欠かない時代であった。敗戦による社会的混乱をまともに被って、一部の子どもたちは、さながら肩で息をしながら生きていくのに精一杯、そして、他の一部は野獣的な逞しさを発揮して反社会的行為に走る、というのが実情であったらしい。

新教育が、慌ただしくスタートを切る。「平和で文化的な未来」を志向して・・・・。しかし、戦いは終わったとは言え、子どもたちは、まだ、平穏な生存すら保証されていないという、そんな状況下だったのだ。大人の側、つまり、為政者も教師も、掛け声だけは盛んなものの、その実、おっかなびっくりの手探り状態、一方の子どもは、食べるものも着るものも、場合によっては住む家さえない、という窮乏のなかで、訳も分からぬまま新教育の波に巻き込まれたのである。

そして、数年が経過し、ベビーブームのピーク時に生まれた子どもたちが、義務教育年齢に到達した。最低水準の衣と食は保証されるようになっていたが、校舎等の物的環境も、教育者の側の指導体制も、いまだすべてが未整備なままの学校現場に、大量の子どもたちがなだれ込んで来たのであった。

戦後のアメリカ教育使節団に指導された教育改革は、アメリカン・デモクラシーの象徴とばかりに、学校教育のなかに徹底した自由と自治、そして自主学習の形態を移入させようとしていた。それでなくとも統制のとりにくい大量の児童生徒たちの前に、自信喪失の教師たちは、統制のかけらも見いだせぬまま、呆然と手をつかねて、彼らを放置する以外にすべもなかったということらしい。当時の教師たちの自信喪失は、先にも触れたが、大戦下の教育から戦後の教育へと、

短兵急に、しかも強制的に、転換を余儀なくされたことにあったが、ただし、それだけではない。教室の内外に溢れ返る子どもの群れに圧倒され、しかも、戦時下の上意下達的システムとは異なり、生徒自らの意見や選択を重視する教育方針のなかで、ただただ手も足も出なかったというのが、ある種の本音ではないだろうか。

自由と自治による教育、すなわち、教育の中心を生徒児童に置き、彼らの主体的で自由な選択学習と彼ら相互の討議に基づく学級運営を尊重しながら、個々の生徒児童がそれぞれに一定水準の学力に到達し得ることを目標とし、教師は、生徒個々人を目標に向けて的確に援助することを役割とする。こうした教育を遂行し、目標を実現するためには、適正規模の生徒集団と熟練した教師の組み合わせが、不可欠であることは言を俟たない。しかし、当時の日本はそうした条件に程遠いどころか、逆にベビーブーマーという巨大な子ども集団と、自信のない教師と、さらに、戦後の疲弊から立ち直り切れない貧しい社会環境という、この上もないマイナスだらけの組み合わせだったのである。

ところで、子どもパワーは、このマイナス条件を逆手に取った。すなわち、子どもたちは、教師権力の弱体化をよいことに、自分たちの主張を大胆に表明し、のびのびと勝手に校内を駆け回ったのである。次の引用は、彼らベビーブーム世代の当時を回想しての言である。

・何しろ、いつでもワイワイガヤガヤと子どもが群れていて、学校中がくまなく自分たちの王国だった。

・教師の忠告など殆ど無視した。何か言われる

と、「だって、民主主義だもん」と言い返すこともあった。

・もっとも、余りの人数の多さにクラス全員の顔と名前が覚え切れず、気の合った仲間たちとだけ、いつも騒いでいた。

・部屋一杯に机と椅子が並んでいて、掃除当番になっても机を片付ける場所もない。ほんの少々の透き間を掃いたり拭いたりすると、掃除は終わりだった。

・運動会のとき、父母たちはグラウンドに入り切れなかったから、校舎の二階に待機していて、自分の子どもの出場の時だけ、前列に出て窓から応援した。

教師の統率の下、一糸乱れず命令に従って行動した「大戦下の子どもたち」は、一体、どこへ行ってしまったのだろう。「お国のため」という一言で、どんな無理難題をも要求することの出来た戦時下の指導態勢と、同じ「お国のため」の一言で難行に耐えた子どもたちとの師弟関係は、取り戻す余地もないと言うのだろうか。膨れ上がる子ども人口と、溢れ出す子どもパワーの前に、大人たちは、ただ、己の無力をかこつしかなかった。そのゆえに、子どもらの側から言えば、よくも悪くも、賑やかでパワフルな時代だったろう。

しかし、この時代、子どもたちの活力が、好意的に言えば、のびやかに尊重されたこと、逆に批判的に言えば放任されたことが、六十年代も後半に入ると大きなつけを要求し始めたのではないか。すなわち、校内暴力や登校拒否の頻発という形で、メディアを騒がすことになったのであった。

（聖学院大学）

幼児期

―排泄とアイデンティティを考える―

津守　真

幼児期は、人間の一生涯で独自な時期である。

幼児は、一日満ち足りて生活すれば幸せになる。

現代は幼児にとって生きにくい時代で、多くの幼児が悩みを抱いている。大人が想像力をもって自分の身におきかえて考えれば、幼児の悩みは人間の心に深く共通であることが分かる。

幼児が存在の危機に立つとき、大人に受け入れ難い行動によって悩みを表現する。

大人がそれを理解しないと、子どもは次第にもっと極端な行動をして大人を困らせる。そのまま次の時期に持ち越すと、その後の成長も歪められる。

私は最近十数年、養護学校で幼児及び学齢の子どもとかかわり、更に大人になった障碍をもつ人たちと福祉施設でかかわってきたが、長い年月にわたって人間の生涯をみたとき、幼児期がいかに独自な意味をもつかをいまあらためて痛感している。

今回は、悩みをかかえたひとりの幼児の保育について述べよう。

排泄物と絵の具を混ぜる

新たに入園した四歳のHくんが、絵の具を床にあけ、そこにおしっこをし、手を入れてこねたときには私共はびっくりした。絵の具を十瓶使ってしまった。この子はおしっこをトイレですることは分かっている。それなのに保育室の真ん中で絵の具とおしっこを混ぜ合わせてこねるのは、よほど気持ちが混乱しているのだろうと私は思った。彼は急に庭に走り、「救急車、怪我した」と言った。この子自身、何か非常な危機感を感じていたのだろう。この前日に、Hくんは美術の先生の顔と口に絵の具を塗り、周囲の人たちを驚かせたという。その先生は、心ゆくまでその絵の具に付き合ったことを私は聞いていた。最初は意味は分からなくても、子どもの真剣さに何か重要なことがかくされていることを察して、十分にそれに向き合ってくれる保育者たちが

いる。その人たちに支えられて私もまた子どもに向かう。

身体存在の混沌

私は親が相談に来たときにも、最初に子どもの前で既往歴や問題を聞くことをしない。まず、他の子と一緒の保育室で子どもが安心して遊ぶようにする。それが子どもが幼稚園や学校を信頼する最初の体験となる。その遊び方を見るとその子の大体の様子が分かる。親の話を聞くのはその後である。そのようにして知ったところによると、Hくんは家族の事情のために、生まれ育った家と父親から離れ、電車に乗って東京の祖母の家に引っ越した。幼児にとっては、家を引っ越すことは子どもの生活を根底から変えることである。この子は私共のところに来たときは、雲の上を歩くような不安定さの中にいたに違いない。その上、東京の家はガラス張りのマンションで、Hくんにとってはいつも他人から見られており、身体の落ち着き場がないのではないかと察せられた。この子は自分の居場所はどこなのかという疑いの中にあった。身体存在に密着した人間の基本的なアイデンティティが混乱していたと言ってもよい。

それから何日もHくんは絵の具をしたたらせて運び、床を絵の具だらけにする日がつづいた。

遠出をする

数週間の後、Hくんは、赤い屋根のついた三輪車で道路に行くといってきかなかった。男の職員が一緒に外出した。遠くまで出かけて三時間くらい帰って来なかった。この三輪車は子どもが自分の足で歩いて動かすもので、子どもたちには魅力があったが、大人は腰をかがめて押さなければならず、大変だった。一緒に出かけた職員はへとへとになって帰ってきた。この外出は何日もつづいた。Hくんが乗り物で遠出するときこの子は何を考えているのだろうと私共は話し合った。電車に乗って東京に引っ越して来たこの子は、こうして車に乗って自分の過去を探しに行ったのではないだろうか。

過去への問い

この頃、Hくんは私をつかまえて真剣な目で話しかけた。H「校長先生たばこすう？」私「吸わない」H「前に吸った？」私「吸った」H「校長先生自動車運転する？」私「しない」H「前は？」――過去の生活と今の生活とがどのようにつながっているのかという疑問をこの子は抱いていることがすぐに分かった。

次の日、Hくんが赤い屋根の付いた三輪車にホースで水をかけて洗っているのが見えた。私がそばにゆくと、「校長先生たばこ吸う？　ビールは？　ウイスキーは？

と、私に真剣に尋ねた後、三輪車に箱車をつなげてくれと私に要求した。紐やガムテープで苦心してつなげたが、なかなかうまくいかない。できそうもないことをやってくれと無理難題を言って私を困らせた。なんとかして私とのつながりをつけ、そして過去と現在との問いをつなげようとしているように思えた。

ある日、Hくんは私にわざとお湯をかけた。これまでの私の体験からは、水を人にかけるのはその人に感心があるからと考えてよい。「ぞうきんもってきて」と私に頼んだ。私が雑巾をもってくると、Hくんは「お味噌がついている」と言う。私が「何にもついていないじゃないか」と言うと、笑顔をみせた（お味噌は大便と関係がある）。

名札への疑問——排泄とアイデンティティ

雨が降った一日、Hくんは、午前中長靴をはいて、かっぱを着たまま校長室のソファの上から外を見ていた。着たままというのは、いつでも出かけられるようにということでもあり、更に登園したときの自分を変えたくないという意思表示でもあるだろう。

弁当の机で、ポットからお茶を床にこぼした。私のコップをとり、私のお茶も床にこぼした。

Hくんはその頃名札に非常に関心をもっていた。自分のロッカーの名札と隣の子の名札を何度も自分で読んだり、私に読ませたりした。一緒に来ていた職員の子どもTくんに（その子は普段は別の幼稚園にいっているので、その子の名札はロッカーに貼ってない）「Tくん　名札ある？」と尋ねた。その子の母親が「ここにはTくんの名札はない、この子の幼稚園にある」と言うと、Hくんは「あっち？」と指さす。名前がロッカーに付いていない子はどこに所属するのか、自分はどこに所属するのかという疑問である。これほどにこの子の意識が明瞭になってきたと言えるだろう。

私はこの子の名前に対する関心を引き継いで、F先生に子どもたちの名札を作ってもらった。F先生は青色の絵の具で名前を書いてくれた。Hくんは緑がいいと言い、青色の名札を破いて捨てた。F先生が緑の絵の具で大きな紙に名前を書いた。Hくんはその緑の絵の具と筆をとり、紙全部をぬりつぶし、「名前が見えない」と言う。あたり一面緑の絵の具になり、どこに何が書いてあるのかも分からなかった。手にも足にも絵の具がつき、私におぶさって洗いにいった。そしてたらいの緑色の水のなかにおしっこをした。さっきお茶をこぼしたところにもおしっこをした。もはや混乱ではなく、確認のように見えた。

Hくんは次の日は職員室で絵をかき、ブランコでゆっくりと過ごした。それから部屋の引き出しを全部、二階に運ばせた。うんちをするといいながら遂にしなかった。

それ以来おしっこと絵の具を混ぜてこねる遊びは全くしなくなった。

この間約十カ月、保育者にとっては子どもとの格闘の日々であったが、この日以来子どもは悟りを開いたかのように変化した。幼児期は変化もスピーディーである。

幼児期に子どもが心に抱いている疑問は、幼児の間に保育の中で答えを見い出しておかねばならない。それが子どもにとって未解決のまま放置されると、表現はエスカレートする。幼児の疑問は人間の根本にふれている。しかも幼児はほんのちょっと大人が分かってくれたと思うと、笑顔をみせる。実にかわいらしい。そして変化も早い。

幼児期は実に貴重な時期である。

排泄とアイデンティティについて考える

・この子は排泄物と絵の具とを混ぜ合わせてこねた。排泄物は本来自分に属する。絵の具は感触や形状が排泄物に似た物質であるが、外界に属する。それを混合させたのは、自分に属するものと属さないものとの境界が混同し、あるいは不明瞭なのであろう。この子どもは存在の危機にあった。自分の存在の根底である家がどこなのか分からなくなっていた。この保育の過程でこの子は自分の名前に気付き、その所属に気付いた。名札に関心をもち、絵の具で名前を書いたり塗りつぶしたりする遊

びによって自分の所属を確認した。最初、排泄物と絵の具とを混ぜ合わせたのは、アイデンティティの問いが子どもの心の中にあったと言ってもよいのではないか。この点についてはいずれ時をあらためてもう一度考察したい。

・この子が次第により明瞭に自分を語るようになったのには、心の中を語っても大人はそれを分かろうとしてくれるという信頼感ができていたからである。最初の日に美術の先生の顔に絵の具を塗ったとき、その先生は大胆にその行為を受け止めてくれた。そのことがこの子に安心感を与えた。顔はその人がだれであるかを判別する第一のきっかけであり、アイデンティティと関連している。

・おしっこ・うんち・トイレなど排泄に関する行為は、躾の対象として見るだけでなく、子どもにとって内的な意味をもっている。

子ども時代と私(14)

いのち恵まれて

上坂元一人

わたしは昭和八年（一九三三年）十月六日鹿児島県北部の宮崎県境に接した栗野という町に生れた。この町は霧島山系北端の栗野岳（標高一〇九四米）の西麓にひろがる典型的な照葉樹林帯の中にある。

更にいえばわたしの生れ育った処は町の中心部から南に約四キロ離れた隣り町に近い山奥の杉、桧、松、樫、椎などの雑木と竹林の中に埋もれたような戸数二十数戸、住民百人ばかりの小さな集落であった。

わがいのち恵まれし故郷にとりたてて語るほどのものは無いが栗野岳の裾野にある三ヶ月池という小さな沼沢は花菖蒲自生南限地帯として国の天然記念

物に指定されている。また駅の近くには霧島山系の豊富な地下水を集めた丸池という日本名水百選に数えられる清冽な湧水池がある。

町のシンボル栗野岳は西郷隆盛がその晩年狩猟に訪れ山腹の温泉で湯治したと伝えられている。そして後に明治十年西南戦争が始まった時、西郷を盟主と仰ぐ薩軍主力部隊は勇躍この地を通過して熊本へ向った。それから七ヶ月ののち戦いに敗れ賊軍の汚名をきせられ官軍に追われた薩摩兵児たちは再びこの地を経て鹿児島へ敗走したのである。

ひとの世の有為変転をよそに物いわぬ栗野岳は今日もその嫋(たお)やかな山容をみせ中腹からは長閑(のどか)に白い湯煙がたちのぼっている。

こうした南国の山懐の集落で生を享けたわたしは生後二月余りのち風邪がもとで発熱し危篤に陥りながら奇跡的に一命を救われたのだときかされた。わたしが生れて六十九日目に曾祖母が亡くなった。葬式に親類縁者が集まるというので母ははじめて産んだ男の子ということもあってわたしを小綺麗にして会葬のひとびとに見てもらおうと考えたらしい。たまたま頭にできていた瘡蓋(かさぶた)を洗って取り除いたのがいけなかったらしい。かかりつけの名医も「もう見込みはない」と匙を投げ、気の早い親戚の何人かはどうせ死んでしまうならついでだからこの子も看取って帰ろうと泊りこみを決めていたらしい。師走の寒い季節のことである。父はハイヤーで老いた名医を迎えに行き「もう一度往診して脈をとって欲しい」と懇願するとその熱意に絆(ほだ)されて「これが最後だョ」と腰をあげ往診してくれたという。「今夜が峠ダ」と言い残して名医は解熱剤を置いて帰って行った。

母は白い粉末の解熱剤を乳首に塗りつけて祈りながらわたしの口にもってゆくけれどぐったりとしてただゼーゼー荒い息をはくばかりで乳を吸う素振りもみせなかったそうである。

何度もなんども繰り返しくりかえし薬をなめさせようと試みて真夜中になってしまったという。「今夜が峠」と医者が言い残したのは「薬をのんで熱がさがれば」という条件つきであることを誰よりよく判っていた母は諦めることなく「この子を助けられるのは私だけなのだ」と自分に言いきかせて解熱剤を塗った乳首をこれでもかこれでもかとわたしの口へもっていきつづけたという。そして真夜中すぎについに奇跡は起きた。

母に抱かれてただぐったりしてゼーゼー荒い息づかいをくり返していたわたしが突然体をピクッと動かしたのを敏感に感じとった母は咄嗟(とっさ)に「息を引きとった」と考えると同時にハッとして急いで乳首をわたしの口に押しこんだのだそうだ。そのときわたしは母の乳首をギューッと吸ったらしい。こうして幾日か死の淵をさまよっていたわたしのいのちは救われ甦った。

わたしが全快してお礼に訪ねた父と母に彼の老いた名医は「ヨカッタネ！お前たちにはかなわんョ」「この子のいのちを助けたのはわしじゃない。お前たちだよ」と一緒によろこんでくれたという。このとき慈愛と献身と苦闘をもってわたしのいのちを救ってくれた母は二十五歳であった。

物心づいた幼年の日、同じ屋敷内に二組の祖父母のそれぞれの家と父母と一緒に住むわたしたちの家という三つの家があった。

家の祖父母には実子がなかった。そこで祖父清右衛門は自分の弟清吉の長男正を養子とした。それがわたしたちの父である。また祖母ケサノは実兄の娘—自分にとって姪を養子正の嫁に迎えた。それがわたしたちの母タカである。祖父母清右衛門・ケサノ、祖父母清吉・チエノのそれぞれの家と父母と住むわたしたちの家、ひとつ屋敷内の三棟の家が揺籃期のわたしの小天地であった。

祖父清右衛門という人は漢籍を修め本草学を学んで漢方医薬に精通し鹿児島市のふたつの漢方薬を扱う薬種問屋、梅北春天堂と坂口薬局の顧問か相談役のような仕事をしていた。そんな経緯から孫を医者にしたいという夢をもっていたようだ。わたしが生まれて間もない頃ほとんど絶望視されていた一命を救われた因縁から「この子は医者になるためにいのちをもらったのではないか」とある種の運命論的に信じこんでしまった節がある。

昭和十五年（一九四〇年）四月小学校入学を迎えた。わたしの住む集落は町から遠いため近在の四つの集落のひとつにある小さな小学校に通うことに

なっていた。全校生徒数約百五十名、授業はすべて複式授業、教職員数は校長以下教員五名用務員一名という分校に近いものだった。

医者になることを目指して勉強させようと考えていた祖父はわたしを五十キロ以上離れた鹿児島市の小学校に入学させることにした。両親には別な考えもあったのだろうが祖父の「この子を医者にするために―」という運命論的な考えと決断には抗すべくもなかったのだろう。結局わたしは祖父の関係する薬局のひとつに寄留下宿して小学校に通うことになるのである。

しかし祖父がわたしに課した医者になるための英才教育の企ては三ヶ月ののち破綻する。神戸にいた叔父（母の兄）がこのことを知り「タカ、お前たちは子どもが可愛想だと思わないのか」と強く窘（たしな）められたことから夏休み前には田舎の小学校に転校させられた。

鹿児島市のM小学校での想い出は担任の先生が宮

崎先生という面皰(にきび)顔のやさしい女の先生だったことと下宿のおばさんが遠足には日の丸べんとうを作ってくれると前宣伝よろしく言うので訳がわからないまま楽しみにしていて遠足の当日弁当箱を開けてビックリ大きな梅干ひとつだったことは妙に記憶に残っている。想えば小学校にはいってはじめての遠足だというのでその幾日か前に母がキャラメルや菓子を届けてくれたのだった。わたしは浅はかにも遠足には日の丸べんとうがあるからと早合点してキャラメルや菓子は遠足にでかける前に食べてしまっていたのである。

田舎の小学校にはいったが同じ集落に同級生は女の子ひとりしかいなかった。集落が違うだけでそれぞれの出身者はまるで別世界の人間のように遠い存在だったように想う。

二年生の冬、大東亜戦争（第二次世界対戦）がはじまりその翌年父が応召して出征して行った。父が帰ってきたのはわたしが六年生になり戦争の終った昭和二十年（一九四五年）の夏だった。中国大陸を転戦していた父はカリエスを病んで内地送還され、小倉陸軍病院を経て終戦のとき熊本陸軍病院に入院中だったから鹿児島の自宅にさしたる困難もなく無事に辿(たど)りつくことができたという。父はこのとき三十四歳、あとで聞いたことだが父は病気のため中国から日本に送還されたために生きて終戦を迎えることができたけれど元気で中国の部隊に残っていた戦友たちはそののち沖縄戦線に投入されて玉砕したのだという。人の運命のはかり難さを痛感させられる話である。

父の帰りを待ちわびていた祖父が父の顔をみると

まるで緊張の糸が切れたように体調をくずし十一月十六日あっけなく世を去った。

祖父が亡くなって翌年中学受験を控えていたわたしはどこかでホッとした。わたしはしばらく前から自分は医者には向かないし医者にはなりたくないと思いはじめていた。いつかそのことを祖父に告げなければならないしそのことでどれほど祖父を失望させるかを思うととても辛い気持になるのだった。祖父は漢籍に親しまれただけに謹厳実直の人であった。その祖父が最後にのぞんで行った湯治場から歩行がままならず手作りの駕籠で担がれ帰宅した情景とその横に小柄で物静かな祖母がそっとつき従っていた姿が今でも目に浮ぶ。敗戦という勇気がなかったのか自虐的すぎると判断したのか終戦という表現で総括された日本の歴史の一大転換期にわたしは旧制中学最後の生徒として県立中学に入学することになる。昭和二十一年（一九四六年）四月のことである。

人間にとってその成長に従いその行動圏が拡大してゆくのは自己という中心点のまわりに樹木の年輪のように同心円を描き加えてゆくようなものであろう。

受験に合格して中学生になった。しかし学校は空襲で校舎が全焼しているため本校代用校舎には全生徒を収容しきれず地域別の二つの分校に振り分けられて授業をうけることになった。わたしは割り当てられた分校のひとつに二年間通学した。自宅から駅まで片道約四キロの山道を歩いて毎日通学した。分校は汽車でひと駅、距離にすれば六・三キロの隣り駅でおり、着いた駅から徒歩で二キロの昔の青年学校だった。三年生になると本校の校舎が再建され分校から本校に合流することになった。二年間刻んだわたしの小さな同心円は完結した。本校への通学は汽車通学に変りはなかったが通学距離三十二キロ所要時間一時間三十分と長くなった。

昭和二十三～四年当時鉄道も資材、燃料共に不足

していて時間も遅れがちで不正確なうえに車両も貨物車両だったりひどいときには材木運搬用の無蓋車だったりした。しかしこうした未知の環境の中で細やかながら前より少し大きなわたしの同心円は刻まれていった。旧制中学三年生を卒業すると自動的に新制高校一年に編入された。わたしはこうして四年間を本校に汽車通学して高校を卒業することになったのだが分校での二年間を予備的な馴化期間として一人の山の子は少しずつ町風の雰囲気に馴れ、新しい友と交わり知識への欲求を刺激する師との出会いに恵まれて外の世界に眼が開けていったのである。四年間通学した本校所在の町とそこで出会う師友、往復通学途中の見聞によってわたしという小さき一人の人間の身と心の旅だちが始まったのである。汽車通学往復四時間の読書は実に豊かな空想と思念の味わい深い恵みの時をわたしに与えてくれた。人の世の生きざまに想いを馳せては荒寥たる知性の原野にはたまた雨けぶる感性の樹林いずれにわがいのちの住処(すみか)を尋ぬるべきかを自らに問うた日夜もついに見果てぬ夢の彼方となった。

後年わたしは「吾以外皆吾師也」という言辞に出会ったとき顧みてこの年若かりし日の自らを懐かしくまた切なく想いかえした。この小さきわたしを慈(いつく)しみ愛し育みくれられし今はなき祖父母たちと父と母、知恵深き家郷のひとびと師と友と血をわけし弟たちと姉妹たちこのいずれにも心からなる感謝を捧げるものである。そして山川草木わたしの身の廻りに存るほどのすべてのものひとつとしてわが師ならざるものはないとわたしは想うのである。

(アジア文化交流協会)

続・『ポケットモンスター』考

山本　政人

夏休みに『ポケモン』をやってみた。最初は面白くてはまり込んだ。簡単に言うと、旅をしながらポケモンを集め、そのポケモンで闘い、ポケモンのレベルを上げていくというゲームである。しばらくは子どものように夢中でやっていたが、次第に面倒になってきた。ある程度ゲームが進むと、新しいポケモンが出にくくなり、レベルを上げるのも大変になって、ストーリーの半分ぐらいのところで投げ出してしまった。予想以上に根気のいるゲームだった。私が飽きっぽいのか、あるいは子どもの方が根気強いのか。私が『ポケ

モン』をしていると、横から息子がいろいろとアドバイスをしてくれた。息子はとうにゲームをやり終えていたが、他人がやっていると気になるらしい。自分でも最初からやりはじめた。

おかげで彼がゲームをする様子を注意して見ることができた。最初は私と同じである。いくつかのポケモンを集め、根気よく闘いを繰り返し、レベルを上げていく。そこまでは同じである。ある程度進むと、やはり疲れるのか、休みを入れながら少しずつしか進まなくなった。しかしそこからが私と違ってくる。ゲームをする時間は少なくなるものの、今度はポケモンの人形を並べ、闘いの再現、つまりポケモンごっこをして遊ぶようになった。一人ですることもあるし、弟を相手することもある。さらにポケモンを素材としたゲームをやり始めた。サイコロみたいなのを振って勝敗を争うゲームや、カードをつかったゲームである。ルールが複雑そうで、私にはとてもできそうになかった。

こういう遊びの場面では、子どもは普段の生活のなかで見せない集中力や知的能力を示す。よく知られていることではあるが、考えるたびに不思議だと思う。そのことはともかく、私の息子を見る限り、『ポケモン』という電子ゲームから、ごっこ遊びやカードゲームへと広がっていくところが、子どもならではなのかと思う。子どもによっては、ゲーム

をすることなく、人形やぬいぐるみを集めたり、カードを集めて友達と対戦したりしている場合も多い。ポケモンはゲームから飛び出して、一つの世界を作り出している。

ただ、息子を見ていて親としては気になることがいくつかある。まずゲームをしているときの目つきである。集中しているからなのかもしれないが、一種独特の目つきをしている。うまく説明できないが、見ていて何となく不安になる。それからゲームで流れている音楽を口ずさむことである。これはゲームをしていないとき（ゲームをしているときは音楽が流れているから口ずさむことはない）に何気なくやっている。ゲームのことが頭から離れないのかと思ってしまう。そしてほかの子どもとの対戦である。人形を使ってやってはいるが、次第にエスカレートして、激しくぶつけたり、投げつけたりするようになる。親としてこれはいかんと思い、しばしば制止する。

心配すればきりがないが、ポケモンのことで頭が一杯になるのではとか、乱暴になるのではとか、一般論としては「そういうことはありません」と言い切るのだが、わが子については自信をもってそう言い切れない。落ち着いて考えてみれば、別にポケモンでなくても頭が一杯になっていることはあるし、乱暴なのはポケモンが原因というわけではない。しかしそういう原因帰属のさせ方はよく見られる。

ある母親の話。小学生の息子がクラスの子に「金を持ってこい」と脅された。そのことを担任教師に相談すると、担任いわく、「最近はゲームなどの影響で」。母親は「人のお金

を脅し取るゲームなんてあるのだろうか」と思ったそうである。これだけでもどういう問題なのかおよそ見当がつくが、少なくとも母親の反問は妥当である。対人関係のなかで起きた問題について、教師はその関係のなかで解明、解決しようとせず、最初から外部の事象に転嫁している。問題解決を放棄しているのである。

私は「ゲーム＝悪玉論」を批判しているが、ゲームを擁護したいのではない。「ゲーム＝悪玉論」が、今述べたような問題解決の放棄をカモフラージュする道具として、ときには問題の本質を隠蔽する道具として利用されていることを指摘したいのである。あらゆることがゲームやアニメなど、いわゆる「おたく文化」のせいにされることがある。しかし問題の本質はそんなところにはない。

ところで問題解決の放棄と問題の本質の隠蔽とでは全く意味が違う。前者はおそらく無責任、怠惰、怯懦によるものであるが、後者には積極的な意味がないとは言えない。問題の本質を隠してしまうことで、当事者や関係者を傷つけないですませられる。ゲームなどは一種のスケープゴート的役割を持っている。

わが子のことに話が戻るが、ゲームをたくさん持っているためか、よく友達がわが家へ

遊びに来るようになった。動機は明らかで、わが家にあるゲームをやりたいから来るのであるが、ゲームから次第にごっこ遊びやカードゲームなどのほかの遊びもするようになった。ゲームをきっかけで遊べるようになってよかったと思う。そして先に述べたような気になることは、わが子だけでなくほかの子にも見られるということがわかった。ゲームだけにのめり込まず、いろいろな経験をしてくれればと思う。

この夏休み、久しぶりにゲームセンターに行ってみた。学生時代にたまに行って麻雀ゲームをしたぐらいだったが、久しぶりに行ってみると浦島太郎だった。今は「ゲームセンター」ではなくて「アミューズメントセンター」と称している。店内は明るくてきれいである。昔の暗いイメージとは違う。昔は同じゲームが何台も置かれていたが、今はバラエティーに富んでいる。格闘、シューティング、レース、体感、クイズ、プリクラ、そしてプライズ。私の目当てはプライズだったが、それもいろいろで、ぬいぐるみ、人形、キーホルダー、時計、食器、歯ブラシなど、明るくて健康的である。昔はライターとか下着とかだったから、明らかに客層が違っている。ゲームをするのだが、実は人がしているのを見ているだけでも楽しい。ただ、見ているだけでは変なので、早々に立ち去るか、やってみるしかない。

客層もさまざまである。子ども、中高生、若者、サラリーマン、子連れの母親、私も含めたカテゴリー不明の人など。最初は何となく決まりが悪かったが、すぐに慣れた。中高

生はプリクラ、若者は格闘やシューティング、主婦やサラリーマンはプライズと、やるものは大体決まっている。プライズゲームにはそれなりのやり方がある。それはともかく、その景品というのが、ゲームやアニメのキャラクターである。ここでもポケモンは大活躍で、ぬいぐるみからキーホルダーから、ほとんどあらゆる景品にポケモンは登場する。うまく取れたとき、思わず「ポケモン、ゲットだぜ」と心のなかで叫んでしまう（続いてチャララララララーというテーマ曲が浮かんでくる）。こうしてゲームセンターならぬアミューズメントセンターにもはまってしまったのだが、大きな問題は結構お金がかかってしまうことである。

プライズを取りたくなる心理は厄介である。似たようなものが売られているのに、ゲームの景品が取りたくて仕方なくなる。さすがは商売で、そう簡単には取れるようにはなっていない。それがわかっていながら、むしろそれがわかっているからこそ、余計プライズが価値あるものに思え、無駄使いをしてしまう。たばこと同じように、やめようと思ってはまた手がでてしまう。自分をいかにコントロールするかが重要になってくる。

私の場合、子どものころから「無駄使いはいけない」ということは頭にあったつもりだが、この有様である。子どもにはそういうことを教えてからでないとさせてはいけないと

思う。しかしこれは自分の問題から目をそむけ、子どものことにすり替えているのではないか。子どもをスケープゴートにしている。

話が飛躍するが、子どももよくスケープゴート的役割を押しつけられる。この場合の子どもというのは、ゲームの場合と同じで、目の前にいる子どもではなく、概念装置としての「子ども」である。概念装置としての「子ども」の問題をいくら検討しても、日の前の子どもはおそらく見えてこない。

考えてみるべきことは、概念装置としての「子ども」がなぜ必要なのか、問題の本質はどこにあるか（二元論だと言われそうだが、ここで言いたいのは「子ども」の問題とされていることの本質が、実は大人の側にあるのではないかということである）、目の前の子どもは大丈夫なのか、などなど、たくさんあって大変である。

（お茶の水女子大学）

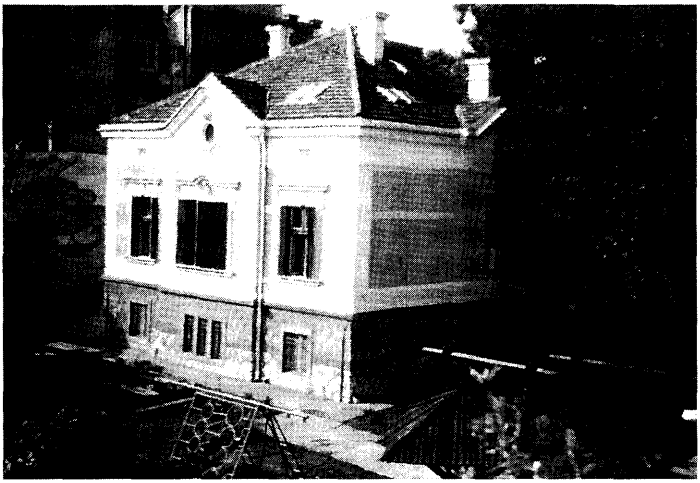
ユーゴスラビアを訪ねて

入江　礼子

三年前、ＯＭＥＰ（世界幼児保育教育機構）の第二十一回世界大会が開かれた横浜。私はそこで東欧の三人の幼児教育関係者に出会い、アテンドするチャンスに恵まれた。ブルガリアのイワン・デミトロフさんとマケドニアのオルガ・シュカリッチさん、それにユーゴスラビアのミリヤナ・ペシッチさんである。さてこの三人のうち、ユーゴスラビアのミリヤナさんとは横浜大会以来、文明の利器であるＥメールを利用してメールのやりとりを続けていた。そして、ついにＯＭＥＰの世界大会直前に彼女の国ユーゴスラビアを訪ねるチャンスが訪れた。

ところで日本からユーゴスラビアには直行便はない。ヨーロッパのどこかの都市を経由するほかないのである。私はパリ経由でベオグラードに入った。パリから定員が一〇〇人にも満たない小さなジェット機の機窓から見えた空港はシーンと静まりかえっており、目に飛び込んできたのは軍用ヘリコプターの並ぶ姿だった。国際線といっても私が着いた時間に他の飛行機の着陸はなく、パスポートコントロールでの入国審査も、これまたこわいほどの静けさのなかで行われた。一国の首都にある空港でのこの姿は、現在のユーゴスラビアの状況を暗示しているようにも思われた。

しかし通関手続きを終えて出迎えロビーに出ると、一転してそこにはタクシーの客引きがあふれかえっていた。三年ぶりのミリヤナさんも、以前と変わらずとても元気そうだった。ご主人のヤンコさんと一緒に出迎えてくれ、いよいよ彼女たちの家に向かうことになった。しかし空港の駐車場で目にしたものは……。アメリカのようにぴかぴかの新車と、走っている間に壊れてしまうのではないかと心配になるような中古車が入り交じった光景でも、日本のように新車と見まがうほどに磨き上げられた中古車の姿でもなく、駐車してある車という車はすべて使い古しという言葉がぴったりの中古車という光景だった。タクシーも同様。新車のタクシーなど一台もなかった。ここで私はこの国がボスニア戦争に連動して国連の経済制裁



◀ベオグラード中心街近くに建つヴィラ幼稚園
もともと幼稚園として建てられたものではない

を受け、経済的にかなりのダメージを受けているという、以前ミリヤナさんからもらった情報を思い出した。経済制裁は終ったものの、その後の政治情勢や経済情勢は決して楽観を許さないものであることを、この空港に降り立ったことで肌に感じた。

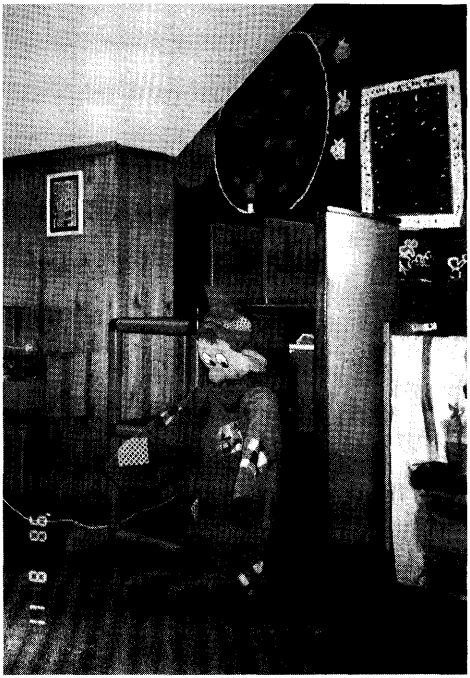
こういう地域でいったい子どもたちはどんな子ども時代を過ごしているのか、あるいは幼児教育がどう行われているのかについてはミリヤナさんの横浜のＯＭＥＰ世界大会のときに発表された論文に詳しい（その一部を『幼児の教育』第九十五巻七号に「ユーゴスラビアの保育の現状と子どもたち」と題して紹介させていただいた）。

その論文と彼女の話から、ユーゴスラビアでは子どもたちの住んでいる地域によって教育格差が大きいことが想像できた。主にボイボディナ自治

州をはじめとする北部地域は豊かな穀倉地帯を持ち、工業も発展していることを背景に、生活が豊かであり、幼児教育の普及度も高い。またベオグラードなどの大都市部の新興住宅地でも近代的な核家族を中心として教育に対して関心も高く、そこでの子どもの生活は日本や他の欧米諸国の子どもの生活と良きにつけ、悪しきにつけ大差はない。一方、この二つと対極をなすのが山間部となっている南部地域であり、その最たるものが今紛争が起こっているコソボ自治州なのである。ここでの幼稚園就園率はわずか五パーセントである（一九九五年資料）。ボイボディナ自治州のそれが九十パーセントを超えることを考えると、その格差に愕然とする。

この格差をこの目で見たかったのだが、コソボが紛争地域になっていることもあり、そこを訪ねることはできなかったが、ベオグラード市内にあるヴィラ幼稚園での見学をさせていただいた（ヴィラ幼稚園については前掲の『幼児の教育』誌に少し紹介させていただいた。ここはミリヤナさんが約二十年にわたって、この園の保育者と共に実践研究を続けられた場である）。この園の建物は幼稚園として立てられたものではない（何か別の目的で建てられた建物が、幼稚園や学校として使われているケースはほかにもあった）。

門から園庭に入ったのだが、ここにはこの国のある意味では殺伐とした状況が嘘のように、暖かいものが流れていた。まず、保育者がゆったりとしている。日本のようにまめまめとは動き回っていない。子どものなかに入り込んで遊んでいるというのでもない。保育時間中に園庭にしつらえてあるピクニックテーブルで保育者の方々とお茶をいただきながらそんなことを思った。そのまわり



▲人形劇遊びのときに使うとういう等身大の人形
ここは劇遊びがとても盛んである

この園では人形劇などの劇遊びが盛んで、一年間をかけて子どもたちを中心にドラマを製作し、最後には皆で楽しむというようなプロジェクトを毎年のようにやっているということだった。このドラマの要素をふんだんに取り入れているやり方は、ブルガリアをはじめとする東欧地域で人形劇などがとても盛んなことと無関係ではないのかもしれない。保育者のひとりのヤドランカさんはこのプロジェクトのなかで子どもたちが作った台本を見せてくださった。子どもたちがベースにしたのは「ヘンゼルとグレーテル」のお話しだったようだが、至るところにこの幼稚園で生活する子どもたちの姿が溢れていては子どもたちが私が日本から持参した林明子さんの絵本「はじめてのおつかい」の表紙にトレーシングペーパーを当てて、日本の「字」を書き写していた。ちょうど、おかあさんのまわりで子どもたちがちょこちょこと遊ぶように。

た。ヘンゼルとグレーテルの住所もヴィラ幼稚園の住所になっていたり。

また唯一の男性保育者であるヴァーニャさんは二十人の三〜五歳の子どもたちのグループを持っていると言っていた。彼には「日本の幼稚園にはコンピュータがいっぱいあるのか？」ときかれた。「えっ」とびっくりした私にミリヤナさんが助け舟を出してくれた。「あれは日本の産業界の話よ。ほとんどの幼稚園はまだコンピュータにまみれてはいないわ」。これと同じ質問は、のちにＯＭＥＰの世界大会の会場でも、パレスチナの人から受けた。ここで私は保育者同士の国をまたがった交流の大切さを感じた。聞いたり読んだりするだけではわからないことも一目見るだけで、あるいはその場に身を置くだけで分かることがある。お互いに交流するチャンスがあれば理解はもっと深まる。と同時に日本の保育に関することも、今は世界の共通語に近くなっている英語で流す必要があるのではとも思った。そうでなければ日本の保育に関することが彼らの目に止まるチャンスはとても少なくなってしまう。現在、日本の情報として世界に流れていることは圧倒的に産業や産業技術に関することが多い。その情報しか持たない人は、そこから日本の保育の状況を類推するしかないということになる。

ユーゴスラビアに入国してから、日本との状況の違いに圧倒され続けていた私だったが、幼稚園に足を踏み入れた瞬間からその緊張が溶けていく

のを感じていた。なにやかやと話しかけてくる子どもたち。なにしろセルビア語なので、ミリヤナさんやらドランカさん、それにバーニャさんの助けをかりなければ分からないことも多かったが、子どもたちが来客があることでちょっぴり興奮しているのがよく分かったし、なんにでも興味を示すその好奇心にとても子どもらしさを感じ、私もちょっぴり興奮し、そしてリラックスしていった。

そういう子どもとの関係で溶け出すものがあった反面、最後まで溶けなかったもの、それは先程も述べた「おとなと子どもの関わり方」に関する違和感である。一昨年ドイツを訪ねた折にも感じたのだが、どうも「おとなと子どもの関わり方」ということに関しては、ヨーロッパ（このように大きく括ってよいかどうかは疑問の残るところであるが）と日本とでは大きく違う。「保育」という和語が欧米の『Early Childhood Care and Education』には訳しきれない秘密はここいらへんにあるのかもしれない。こればかりは、その場に身を置かなければ感じとることができないものだが、この問題をもっと突っ込んで考えていくことが私に課せられた課題と思わされたユーゴスラビア、ＯＭＥＰ世界大会への旅であった。

（鎌倉女子大学）

ある日の育児日記から

(97)　佐藤　和代

ある日、圭が帰ってくるなり「学校で男子が、圭のこと、鬼ババって呼ぶんだ」と憤慨していました。思わず「圭、身から出たサビ、って言葉、知ってる?」と笑ってしまった私。圭はどうも、口うるさいのよね。学校でも、そうじをさぼっている男の子なんかを叱り飛ばしているんでしょ。どこのクラスにもいるわね、そういう女の子。

悪い子じゃないんです、自分で正しいと思ったことをずばずば言ってしまうだけ。とはいえ、言われた方はいい気はしないでしょうし、せめてやんわりと言うことを覚えてほしいのだけど。正しいと思っても、きつい言い方は人を傷つけるから、などと話してはみましたが、理解したかどうかはあやしい。もう少し大きくならないとわからないことでしょうか。

大人からは「しっかりしている」とほめられる圭ですが、あまりに「しっかりもの」と決めつけられてしまうと、この先、苦労するんじゃないかしら。…なんて心配しはじめていたところへ、友人の漫画家から電話がかかってきました。「今度の作品、圭ちゃんモデルにしてもいい?」「いいけど、どういう話なの?」「妻に逃げられたお父さんと二人暮らしの、しっかりものの女の子の話」。あああ、もう評価が固まってしまった。

クリスマス会で・ヨセフ役に。衣装がかわいい!

自分を確かめる

田中三保子

三月に、二年ないし三年担任した子どもたちを送り出した。振り返ってみると、彼ら彼女らは幼稚園という場で物に出会い人に出会い、身体ごと試しぶつかり、楽しい思いも挫折も味わい、そして何かを学び取る体験を重ねて卒園していった。端から見ればただ遊んでいるようにしか見えないことでも、それぞれにとっては、物や人を通して相手を知り自分を確認する大切な過程だったように思う。自身のやり方にこだわって自己表現し自己主張し、少しずつ自己調整できるようになって、彼らは保育者としての私の目の前を駆け抜けていった。私はといえば、個性の強さに圧倒されながらも、気持ちをくみ保育者としての思いを伝える努力をし、ときにどうしてよいかわからずに一緒に悩む日々だった。私の保育

者としての姿勢が問われていると思わされることもたびたびであった。

それから一月も経たないうちに三歳児を迎え入れた。そして今、ちょうど二学期が始まったばかりのところである。穏やかに友だちとのかかわりを楽しみながら遊べるようになった様子を目の当たりにして、子どもたちは三歳になったばかりの年齢でもすでに自分を確認する作業を始めていて、時期が早いほど根元のところから自分を問い直しやすいのではないかと改めて感じている。具体例を通してそのことを考えてみたい。

ちょうちょつかまえたよ

「せんせー、ちょうちょつかまえたよー」A夫の声に園庭への出入り口を見ると、彼が虫かごを私の方にかざしている。私は保育室の奥でD子にコンピューターを作っていた。すぐ行くべきかちょっと迷ったが、D子はずっと待っていたしあと少しでできあがるところだしと思って、返事だけして作ることを続けた。A夫はB夫、C夫と虫かごを見ながら話をしている。「ごめんなさい、遅くなっちゃって」と言いながらかけつけると、虫かごを見せてくれて、中にはしじみちょうが一羽入っていた。「すごいわねー。どうやって捕まえたの」と聞くと、それぞれに説明してくれる。一斉にではなくて、自然な形で順番に。そしてまた三人は山に戻っていった（園庭の一角にお山と呼ばれる小高いところがある）。私はこのときの様子に軽い驚きを覚えた。私への報告が誰かが誰かを押しのけるかたちでなく、相手が終わるのを待って一人ずつ行われたことに加えて、A夫の変化にであった。

A夫は入園してしばらくは周りの様子を見ながら遊んでいた。周りが見えてくると少しずつ行動半径が広がり、一人で山にも行かれるようになった。だ

んご虫をたくさん見つけて持って帰る日がちょっと続いて、ほかの子が真似をするようになったころ、ぱたっと虫取りをしなくなった。いつもと同じように袋を持って出かけていって戻ったとき、袋の中には園庭の砂利がつまっていることが重なった。「だんご虫見つからなかったの」そんなわけはないと思いつつ聞いてみると、「お母さんがだめって言った」とぽつりと答えた。砂利は虫の代わりだったのかもしれないと感じ、それならばせめて石拾いが楽しめるといいと思って、「Aちゃん、きれいな石があるの知ってる。チョコレートみたいな石もあるの」、と私はA夫を誘って一緒に石拾いをした。このころのA夫はまだ母親の気持ちに従おうとしているようだった。私が提案した石拾いだったが、A夫はしばらく熱中し、他の子どもにも伝播したりした。そしてだんだんと母親のことは口にしなくなっていった。

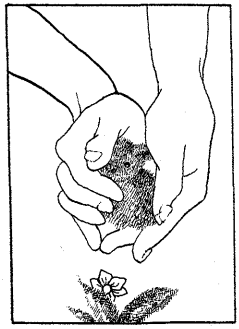
B夫は入園してしばらくは母親と離れられなかった。二週間ほどで一人でいられるようになったけれども、ほぼ同時に遊具を投げたり子どもをたたいたりするようになった。どうして突然そんなことをするのか理由はわからなかったが、心の中の何かに突き動かされてやってしまっている印象を私は受けた。何とか時間を作って外に誘うと穏やかに過ごせるが、私がなかなか外に出ていかれずにいるとB夫も室内にいて、泣き声に振り返ると誰かが彼にたたかれているというような日が続いた。A夫がだんご虫をつかまえてきたのを羨ましそうにしているので、A夫に声をかけて一緒に山に行ってもらったが、この時はだんご虫の魅力に惹かれて私に見送られて出ていくことができた。かなり長い時間が経って戻ってきたときには二人とも得意げで、たくさんのだんご虫を持っていた。この体験がよほど楽しかったらしく、そのときからB夫がA夫についてい

ることが多くなり、何もなければ私を必要としなくなった。

A夫とB夫が一緒にいる時間が増えてくると、今度はA夫も物を投げたり人をたたいたりするようになった。B夫の行動を間近に見るうちに誘発されたのだと思う。A夫の場合には、憧れのウルトラマンになって悪者をやっつけるつもりでそうしているらしいのだが、危なくて目が離せなくなった。そのうち、A夫はB夫と関係なく一人でも誰かをたたき、さっと物陰に隠れたりもするようになった。彼は私の視線に出会うとまずかったという表情になったが、その奥に、でもやってみたかったという彼の思いを私は感じた。ついやってしまってというより、意図的な行為のように思われた。そのたびごとに、身体で止めたり、相手は悪者ではないこと、理由のいかんに関わらずしてほしくないことを伝えても伝えても、しばらくは止まらなかった。

一方で、A夫はいろいろな体験を心から楽しんでいるようでもあった。年長組のお店やさんがきっかけで始まったアイスクリーム作りにも、ときどき思い出したように取り組んだ。ほかの子どもたちはもうすっかり忘れていたり見向きもしなくなったころに、「アイスクリーム作りたい」と言ってきて、「今度はレモン味にしよう」などと言いながら、一人であるいはB夫と楽しそうに作り、大事に持って帰った。

A夫は幼稚園生活を通して、自分を表現したり自己発揮する心地よさを徐々に感じ始めていったのだ



と思う。それとともにA夫の声のトーンはだんだん高く大きくなるようであった。山でいろいろな物をよく見つけてくる。そうすると、大声を張りあげて私を呼んだ。「せんせー、ほら、これを見ろ」私が目の前にいても精一杯声を張りあげたまましゃべる。A夫の気持ちが躍動しているのがよくわかるので、初めのうちは私も相づちを打つしかできなかったが、大声で絶え間なく叫ばれるとさすがに気になる。彼の嬉しさに共感しつつも、「もっと小さな声でも聞こえるわ」「見てって言ってくれると嬉しいんだけど」などと言ってみたが、彼にはほとんど届かないようであった。それほど毎日夢中で過ごしていたのだと思う。

二学期が始まって、A夫には前よりも落ち着いた印象を受けた。声の調子も普通になったし、動きもおとなしい感じになった。悪者に見立て戦いを挑んでいた友だちにごく自然に自分から近づき、一緒に遊ぶようになった。「ちょうちょつかまえたよ」と言ってきたとき、すぐに私に見てもらえなくても、必ず見てもらえると信じて友だちと穏やかに待つ余裕が感じられた。

A夫は幼稚園入園をきっかけに、家族と離れた新しい世界へ一人で歩みだした。そして例えば、自分の思った通りにやってみるおもしろさを味わい、工夫すればそれが実現できることを感じ取っていった。また、自分の行為に伴う相手の反応にはいろいろあって、ともに楽しむことの喜びも、相手に泣か

れたりたたかれたりする苦い思いも味わった。それらの一つ一つの体験がA夫を揺さぶり、また新たな行動へと彼を突き動かしていった。誰かに指示されたのでも強制されたのでもなく、自分の感覚、意思で動き、試し、味わう体験が自ずとA夫に変化をもたらしていった。

子どもたちは入園したてのころは、それまでに身につけてきた価値観や生活のしかたそのままに、毎日幼稚園で過ごす。ところが、一人ひとりが身につけてきたものは違っていて、自分の意思が通じなかったり思うようにならなかったりする。さらに周りの子どもたちのやりかたがモデルになって、いいことも悪いことも試してみようとする。そこから彼らなりの試行錯誤が始まるわけである。あれこれ繰り返し試し、さまざまな反応にぶつかり、嬉しかったりいやだったりする。一度で学びとれることもあれば何度も繰り返して試したいこともある。そうやって子どもたちは、幼稚園での生活を通して周りを知ろうとし、自分を確かめようとしているのである。この時期に、自分の五感をフルに使って確かめる体験を重ねていくことは、どんなときにもどんなことにも自分で立ち向かっていける力を養ってくれるのだと思う。

ここでは一人の子どもの一学期の軌跡しかたどることができなかったけれども、もちろんほかの十九人にもそれぞれの揺れ動く軌跡があった。二学期はまだ始まったばかりである。これから先、子どもたちがそれぞれのやり方で自分を確かめつつ世界を広げていかれるように、保育者として関わっていかれたらと願っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

編集後記

明けましておめでとうございます。今年の表紙絵は北村俊道先生に描いていただきました。一年間、どうぞよろしくお願いいたします。

＊

阪神大震災から四年が経ちました。本誌では、〝この体験を忘れることなく、逆に積極的に意味づけながら大人も子どもこれから共に歩み行く方向を一緒に探していきたい〟と「震災後の子どもたち」の連載を始め、いまも続けています。関東にいながら、毎日の生活にも窮する現地から書いて下さる方を探すという試行錯誤の中で色々な方との出会いがありました。今回の森末哲朗さんもその一人です。震災後一年間に及ぶ公園でのテント暮らし、新しい建物への生活の変化など、子どもたちの様子を何度か伝えていただきました。その中で、子どもを気遣う大人と、時には大人を励ますほどの逞しさを見せる子どもたちの生活振りを窺うことができました。

その〝どんぐりクラブ〟の様子がテレビで放映され、彼らの生活を見ることができました。私には二階の部屋で過ごす彼らの姿が印象に残りました。そこは、時に子どもたちだけでの相談の場であり、時に〝気ままに〟本を読んで静かに過ごす場にもなっていました。二階は大人の目の届きにくい場所です。そのことが、群れることと一人で気ままに過ごすことの行き来を随分自由にしているのだと思いました。（A）

幼児の教育

第九十八巻　第一号
（一九九九年一月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十一年一月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112—8610 東京都文京区大塚一—一—一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108—8620 東京都港区三田五—一二—一
発売所　株式会社フレーベル館
〒113—8611 東京都文京区本駒込六—一四—九
☎〇三—五三九五—六六一三（営業）
☎〇三—五三九五—六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇—二—一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

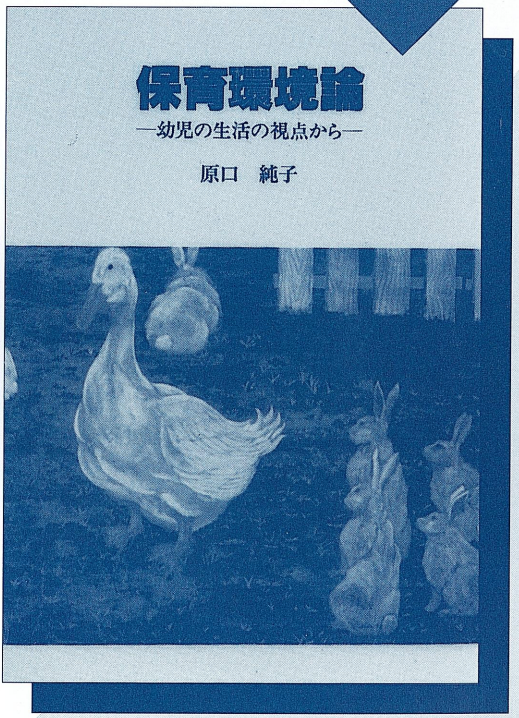
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

保育環境論

—幼児の生活の視点から—

発売中

幼児を取り巻く保育環境の具体的な事柄について、“幼児にとってそれは何であるか”の視点からとらえようとしたもの。
粘土や折り紙などの教材から—クラスの人数、園舎の構造などまで幼児の目、心、身になって見直し、環境が幼児の経験内容の質を左右することを明らかにします。



好評既刊本！

原口純子　著

A５判　176頁　定価：本体1,600円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第九十八巻　第一号　平成十一年一月一日（毎月一回一日発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

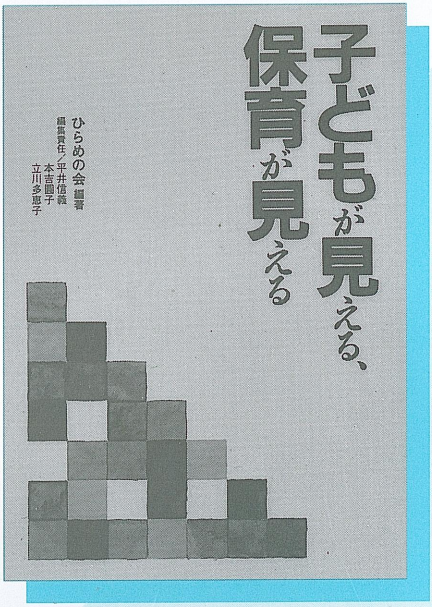
子どもが見える、保育が見える

ひらめの会　編著
編集責任／平井信義・本吉圓子・立川多恵子

発売中

保育に花を咲かせましょう

心踊らせて保育の現場に飛び込んだものの、保育しにくい子どもに困ったなと感じたり、同僚・先輩と保育の意見がかみ合わず人知れず悩んだり、保護者との対応に戸惑うといった経験をされてはいませんか。
本書はそんな悩みをお持ちの保育者に、さまざまな角度から問題解決の糸口を示してくれる格好の保育入門書です。
明日の保育を実りあるものにしたいと努力されている方々にお勧めします。



◆好評既刊本！

A５判　288頁　定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五二四円）☆